

明治三十七年三月

崇廣

第貳拾號

滋賀縣立第二中學校崇廣會

◎崇 廣 第貳拾號目次

●論 說

○体育之必要	特別會員	水 野 透
○英雄と青年	第五年級	橋 本 久 一
○謙遜の説	第五年級	野 村 佐 一 郎
○開拓と北海道	第四年級	伊 藤 顯 山
○獨立自助の精神	第三年級	三 上 哲 岩
○吾が生涯	第三年級	上 山 佐 一 郎
○農業論	第二年級	高 橋 源 治 郎
○友と交はる道	第二年級	池 田 元 次 郎
○少年の責任	第一年級	山 田 武 治
●英 文		
○Character is Power	特別會員	佐 藤 春 吉
○雄々しき少年	第二年級	西 澤 鐵 次 郎
○男らしき少年	第二年級	富 永 孟
●文 苑		
○予が住ひの記	第五年級	中 村 祐 寛
○深淵のはこり	第五年級	林 正 義
○忍ぶ草	第五年級	山 本 繁 七
○佐和山登り	第五年級	金 谷 謙 一
○湊河原	第四年級	澤 野 好 三
○晩夏の半夜	第三年級	倉 橋 藤 治 郎
○春と秋と	第三年級	野 間 莊 三 郎
○旅行記の一節	第三年級	西 澤 德 治 郎

○面影

○秋のいろく

○山里の春

○亡父を思ふ

●漢 詩

○閑吟五首

○遊西明寺

●和歌俳句

○こしなれ 五つ

○向日葵集

○秋山の月外二首

○歌一首

○俳句

●新體詩

○即興

○市にゐる詩人に

●修學旅行記

●通 信

○東京だより

○京だより

○京都に於ける我れ出身者の懇親會

○金澤だより

●雜 報

○數十件

第三年級 德 永 英

第二年級 男 笹 俊 男

第一年級 近 藤 孝 治 郎

居 川 市 二

中 村 祐 寛

飯 村 祐 念

伊 藤 榮 二 郎

野 村 義 雄

金 谷 謙 一

山 本 繁 七

横 田 慎 次 郎

細 江 忠 一

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

澤 村 專 太 郎

終に之を併吞せむとす若し滿州にして露國の領有に歸せむか韓國の保全は支持するに由なく極東の平和亦素より望むべからず故に朕は此期に際し切に妥協に由て時局を解決し以て平和を恒久に維持せむことを期し有司をして露國に提議し半歳の久しきに亘りて屢折衝を重ねしめたるも露國は一も交讓の精神を以て之を迎へず曠日彌久徒に時局の解決を遷延せしめ陽に平和を唱道し陰に海陸の軍備を増大し以て我を屈從せしめむとす凡露國が初めより平和を好愛する誠意なるもの毫も認むるに由なし露國は既に帝國の提議を容れず韓國の安全は方に危急に瀕し帝國の國利は將に侵迫せられむとす事既に茲に至る帝國が平和の交渉により求めむことたる將來の保障は今日之を旗鼓の間に求むるの外なし朕は汝有衆の勇武なるに倚賴し速に平和を永遠に克復し以て帝國の光榮を保全せむことを期す

御名 御璽

明治三十七年二月十日

各大臣連署

崇 廣 第貳拾號

論 說

体育の必要

特別會員 水 野 透

既に第十七號に述べたる如く、規定運動は、体育上最も必要にして効績の著大あるものたる事、疑ひを容れざる所あれども、健康体は各器皆應分の運動を有するものあり、故に若し、其運動に不足を生ずる時は、其器の營養妨害を起し、多少の變質又は衰頹を來すに至る、之に反して、其運動若し過度ある時は、其營養機、始めは一時活潑の觀を呈す可しと雖も、終に又衰頹を來たを免かれざるものとす、是れ即ち規定運動の必要ある所以ありとす。

規定運動は即ち体操にして、一定の規律を設け筋肉及關節の順正なる作用に従ひて、四肢軀幹を屈伸運動し以て身体各部をして平等に發育せしめ、美正自然の姿勢を養成するを以て目的とす、故に体育上最も缺く可からざる處のものにして、之を別つて普通体操、徒手体操、器械体操の三種とす。

規定運動の必要、既に前項に述べたるが如しと雖も、此運動は比較的直接に精神上の興味少く、又其開發上の効用少きを以て、之に交ふるに自由運動を以てするをよしとす、而して自由運動とは、散步、游戲等總ての運動上一定の規律を設けざるものと稱にして、自然各人の體質に適合し、身体精神ともに之を増進發

揚せしむるものあり、殊に空氣の清潔なる山邊水畔の散歩の如きは、最も効益著大なるものとす。

技術運動の必要は、一定の規則によりて其技術を演練せるものあれば、自然身体の運動法式に適ひ、殊に精神上の娛樂最も多きを以て、其効績上殆んど規定、自由の兩運動を兼有するものありと雖も、只僅に不正發育の矯正凝硬の解消は勿論、輕捷強靱等に於ては規定運動即ち之がために規定したる体操よりも、比較的奏効少なきが如し、而して其種類を擧ぐれば、劍術、馬術、柔術、漕艇術、游泳術、遊戲等ありとす。

運動一般の効益は、体育上に効益を與ふる事最も洪大あるは論を俟たざる所にして、我國現時の如き、彼勞働社會の狀態を見るに、衣食住其他衛生上欠點甚だ多きにも係らず、身体大に強健（間々不正の發育を免れずと雖も）ある者最も多く、其上流社會に在ては却て健康者の少少あるを以ても之を知るを得べし、然れども世人往々にして、運動によつて生ずる處の効益は、只筋骨の發育を助くるに止まるものゝ如く、其區域頗る狹隘あるが如し、抑も運動が直接間接に身体に及ぼす處の影響は甚だ著大なる者にして、彼の隨意筋内の作用は、他の機關の運動に緊密なる必要なきものゝ如くあれども、其實最も必要なるものにして、仮令は心臟の如きは、隨意筋内の作用に依て感動せらるゝ事甚だ大にして、他の機關に於ても亦然りとす、今各器各系に就て其効益を左に概示せんとす。

血行器上の効益に於ては、心臟の機能盛にして、脈膊を増加し、血管中の壓力を増加し、而して以て全身の血液循環を旺盛ならしむるものにして、總て身体は其の何れの部分あるを問はず、新組織を供給し、老廢質を排泄するの作用を營爲するものは、血液ありとす、故に血行の旺盛あるは、身体各部の新陳代謝を催進し、依て以て新組織の供給及老廢質の排泄の度を高むる者にして、是即ち運動の健康を進むる所以あり。

呼吸器上の効益にありては、肺臟の機能抗進し呼吸の數を増加し、肺臟の新陳代謝を旺盛ならしめ、酸素の

吸入及び炭酸排泄の量に著しき増加を呈し、且胸廓は漸く擴張するを以て、肺の活量益々増大するものあり、而して肺は新鮮の空氣を體外に取り、又變敗したる空氣を體外に除去し以て身體の各部より持來す所の、不淨血液をして再び身體を營養すべき新鮮なる血液に變ずるの作用を爲す所の人生必要の器官あり、故に肺臟の機能旺盛あるときは、隨て身體益々健全に趣くべきは當然の事ありとす。

筋肉上に就ての効益は、其發育盛にして力量を増加し、其伸縮の作用を活潑ならしむ、是れ他なし、新陳代謝の機能旺盛とあり、老廢質の排除を盛にし、新組織の發生を増進するを以て、筋肉の纖維漸く増加して、其質益々強實するが爲にして體育上最も効益あるものとす。

（未完）

英雄と青年

五年級甲組 橋 本 狂 虬

醉枕窈窕美人膝、覺握堂々天下權。とは之れ短句よく英雄の真相を道破せるの言として古より人口に膾炙せる詩あり。英雄たるの快は此に止まらず。入りては廟堂に坐して、百官を進退し、出でば、劍楯の間に三軍を叱咤す。男子此世に於ける快樂は、蓋し英雄たるに至りて極まる。

成吉思汗蒙古の一隅に起り、兵を擧げて四方を攻畧するや、戦へば勝ち、攻むれば取り、東朝鮮半島より、西は露西亞境太利に到る迄、萬里無敵の境を進むが如く、歐亞の二洲を席卷して、終に古今無比の大帝國を建設し、歴山大王マセドニヤに與れば、雅典の富強も、ダリアスが大軍も之を如何ともする能はず、波斯を降し、印度を服し、未だ幼年からずして、天下また征服すべき餘地なきを歎するに至る。其壯其快、千載の下史を讀むものをして轉た欽羨に堪へざらしむ。吾人此等英雄が偉大なる功業の跡を見れば、誰しも必ず舌

を巻きて、彼等が怪力の至大至強無理無極あるに驚くと共に、能ふべくんば、我も亦かゝる鴻圖偉勳を立て、古英雄と比肩せむとの念慮を萌するべし。されど身既に一家を整へ、妻兒を有するの域に達せる輩は、今更如何に大望を懷抱するも、到底成功をべからざるは瞭然あれども、猶年少氣鋭の青年にあつては、將來一國の宰相となり、三軍の統帥ならむとするは必ずしも不可能とのみ斷すべからず。否古來の英雄俊傑は、皆これ一個青年の進化したるものあるにあらずや。元來空想に富み、功名に走るは青年の常あるを、況して過去の諸英雄が掀天翻地の大活劇を演ぜしを聞いては、覺えず垂涎三尺、彼も人も、我も人も、我豈獨り英雄たる能はざらむやと奮然蹶起するも宜也。されば此等青年が下宿の樓上常に夢みる所は、古英雄が偉業の跡からぬはあく、牛肉の會食に泡を飛ばして談論する所、亦那翁比斯馬克を離れざるあり。是當に然るべきの理にして決して異しむに足らず。且志望の遠大あるはやがて効果の顯著ある所以、青年たるもの志望を立つる、あく迄遠大あるべくして、毫も踟躕するを要せず。然れども窃に憂ふ。彼英雄は何人にも到達し得るものありや、換言すれば男子志望だにあらば悉く、英雄たり得るやと。

昔者毛利元就幼時侍臣に負はれて嚴島に詣で、侍臣の熱心に祈願せるを見て其故を問ふ。臣答ふるに、元就が後年安藝一國の主たらむ事を祈りしを以てす。かれ喜ばずして曰く、何ぞ日本全國の主たらむ事を願はざると、后遂に山陰山陽十餘ヶ國の主とあれり。新井白石は三百の青錢に窮せるの時に於て、猶豪語して曰く、「大丈夫生を此世に承く、生きて封侯たらずんば死して閻羅王とあらむ」と、かくして彼は終に從五位下筑後守とあれり。之を以て之を見れば、大望あるもの必ず成功し、大言するもの必ず英雄なるが如くあれども、彼白石は三歳にして書を能くせし神童あり、赤貧洗ふが如き身を以てすら、猶他に依頼する事を厭ひて、豪富が求婚を付けし程の硬骨漢也。元就が此言をあしたるは、未だ玩具を弄する計りの幼童かりき。其他豊公

を見よ、華盛頓を見よ、歷山を見よ、如何に古來の諸英雄が、凡庸に超絶せる一點を具備せしかば、皆人の否む能はざる所あり。

現時全世界に於て、知名の士を算するも、猶百千を以て數ふべし。然も其中一個の比斯馬克、具翁に比すべき人物なきに非ずや。以て如何に常人が英雄の域に達する事の至難あるかを知るに足る、畢竟英雄は一天才のみ。望んで達せらるべきに非ず。又學んで至るべからず。庸人猥りに企及せむとせば、必ず意外の失敗を重ねて復た立つ能はざるに到らむ。

英雄俊傑が一朝一夕にして、到達すべからざる事、此の如く瞭々たるにも拘はらず。天下青年の一部には猶此英雄たらむ事を夢想せるものあり。予は敢て夢想といふ。成し難きを遂げんと欲す、夢想に非ずして何ぞや。殊に人間不世出の英資を有してすら、風雲の乗すべきあく、機會の捉ふべきあくは、空しく草萊の間に隱没して、現はれ難きを、況んや其身絶えて凡衆に卓出せる天資あるあく、何等奇とすべき才畧をも有せざる平々凡々の青年輩が、吹く風も枝を鳴らさぬ太平の代に於て、猶且英雄たらむ事を希ふといはゞ、是無謀を過ぎて最早滑稽也。天下又之に勝る矛盾あらむや。更に最も憂ふべきは、古英雄を慕ふ青年が、稍もすれば其先淑せる偉傑が性僻をば恰も英雄の資に缺くべからざるが如く思惟し、磊落を銜ひ、闊達を装ひて粗野暴慢終には度し難き無頼漢に墮落せむ事是也。

彼等は曰く、予は將來宰相とありて國政を左右せむ事を期す。豈區々たる數理の研究に精力を耗せむや。吾輩次代の將軍を以て任するもの、書畫の如き將た何するものぞ。かの項羽を見よ、書は姓名を記するに足る、劍は一人の敵學ぶに足らずと喝破して遂に覇業を成しゝにあらずや。又比公を見よ、青年學生時代に於ては亂暴放恣級中に冠たりしと雖も、よく鐵血宰相の榮位を荷ひしに非ずやと。言や善矣、敢て問ふ、卿等項王

比公に比して、幾何の才畧力量を有するか。己が器を知らずして猥りに英雄たれむと欲せ。遂に獅子の皮着たる驢馬とあるかくんば幸あり。

猶一層酷だしきは、古來二三の英雄が婦人を幸せしを見て直に英雄好色と云ふが如き不道理ある惡諺を流布せしめしより、人間が本能の弱點に投じて、忽ち一個動かすべからざる格言の如く思惟され、引いては、今日放蕩青年が唯一の辯護として、誇り顔に、予は英雄を學ぶもの、酒色を近くる、又當然のみを放言せしめ、彼等の父母が勞苦の結晶たる學資を塵芥の如くに亂費し、酒に荒み、色を漁して顧みざるに至る。而して着實ある青年を目しては、彼輩碌々、與に語るに足らずとあして擯斥せむとす。洪敷せざらむと欲するも得べしむや。

此等青年の齡漸く加はり、往年の客氣又漸く失すると共に、疇昔の大望野心は終に空想に止まりしを見るに至るや、茲に始めて長夜の夢の覺めたるが如く、倉皇處生の道を講ずるも既に遲し。盛年學ぶべきの時は再び來らず。日月流水と共に逝いて復た歸らず。最初は輕侮して、死すとも斯る卑賤の職には就くまじと思ひし程の地位をだに得る能はず。嘗ては碌々與に語るに足らずとあし者丁風に甘んじて、一生を了らざるもの稀あり。是猶忍ぶべし。頽齡に至るも曩の非を悟る能はざるの徒は、自ら凡人よりも劣れるを知らずして、徒らに常人と伍して、正業に服するを厭ひ、英雄の痕跡を倣ひて、及ばざるの結果、不生産の人類ある壯士の群に落ち、世を騒がし、人を毒して果は、警吏の配慮を煩はすに至る。これ元より無謀怠慢の應酬ありとはいへ、また憫れむべきにあらずや。

英雄を學ぶ事の不可あるは此にて瞭然たれども、かれ英雄は、又社會の爲め人類に取つて毫も用あき者あるのみならず。そが偉大ある名を成さんが爲めには幾千萬人民を犠牲に供して憚らざる慘忍酷薄の怪物たる也。

見よ彼得やカザリンが帝國主義實行の爲めには、露西亞國のみ徒に膨大して増々猛威を逞しうせるに反して哀れにも波瀾は滅亡して、千載自由の空氣に觸れざるにあらずや。歴山やシーザー等二三英雄が偉名の裡には、數十萬の弱者が悲泣の音の包まれたるを見ずや。かの英雄が鐵蹄の轟く所、旌旗の翻る所、野に青草あふ、家に雞犬の聲を絶つに至る。あゝ詩人をして「一將功成萬骨枯」と歎せしめたるは卿等英雄にはあざりしか。嗚呼英雄よ、俊傑よ、自己が偉名を成さむが爲めに、萬民の痛苦を顧みざる英雄よ、吾人又何の故あつてか卿等を讚美せむ。

人誰か功名の念あからむ。齷齪として終生鋤鋤を伴とするよりは、一朝手に唾して功名を取るの快を想はざるものあらむや。されど功名國家に何の益がある。金冠玉衣外貌計り嚴めしくも、何等社會人民に貢獻する所なく、徒に廣舌を弄して、一時を塗抹するが如き偽英雄よりも、靜かに田園を耕して、着々實効を奏する野人の如何に尊きよ。

又多年生民を苦しめし當然の酬ひとして、英雄の末路往々否殆ど悉く悲慘の運命に斃るゝを常とす。ナポレオン、シーザーを始めとし項羽チャールス十二世等枚舉に遑あらず。咄何者の痴漢ぞ。這般厭ふべき、怖るべき英雄たらむ事を希はんとはする。

多大の渴仰者ありて、行く所常に讚美の聲を以て満たさるゝが如きは、羨むべきが如しと雖も、一朝榮枯地を更へて、前日の讚美は後日の楚歌と代はるが如き事あらば如何。身は金殿玉樓に起臥し、啖ふに美味あり、侍るに佳人あるの地位は樂しむべきが如く見ゆれども、深夜人靜まりて、萬籟閑たる時、國家の安危や、我聲名の前途を想及して、不安の念の萌す事あらば如何。假令多數の渴仰者なくとも、又一人の譏毀するものなく、身は矮屋に住するも、我爲すべき業務を了へば、快然安眠するを得る、孰れぞや。

彼は百千の生靈を壓殺して以て快さあり、此は自然を身の慰藉として楽しむ。我望む所は彼にあらずして此にあり。而して是最も天意に叶へる道あり。

(完)

謙遜の說

第五學年 野村 佐一郎

人は社交的動物にして社會を離れて單獨に生存し得べき者にあらず。各々其才能力量を以て互に相倚り相助けて初めて社會をなし、其社會の安全を保持する爲めに法律道德を作る。蓋しこれ各個人の主張する所は千差萬別にして、前後左右に衝突し易きを以て、各其主張の少部分をさきて社會共通の法律道德を作り、以て之の衝突をさげんが爲めに外あらず。

故に人爲法たる法律も自然法たる道德も、これ社會的動物たる人類に必ず必要の者あれば、世界到る所道德なきはあく、法律の設けなきはあし。實に法律道德は吾人の一日もゆるがせにすべからざるあり、而して恭謙己れを持すべきはこれ道德の根底にして 聖勅に明々たり。

然るに今日の學生如何、世人如何、彼等の大部思へらく「彼は彼あり、我は我あり、彼にして我に禮からざれば何それぞ我れ彼れに禮あらんや」と、而して各自皆互にかくの如く思へり、これ道德の日に亂れて善風の世を去る所以あり。何ぞ彼等の自我主義ある、彼等は人間相互の恩恵を知らざるか。

それ道德は其根底我主張の幾分を犠牲にし即ち自利を謹恭し謙遜し以て社會的動物たる人類相互の圓滿を計るものあれば、楽しき行ひにはあらず必ずつらき所あり。然れども苦樂難易にかゝはらず吾人は道德を守らざるべからず。

諸君例へば思へ、一級の生徒は學力殆ど同様あり、一長一劣別に感心すべき程の者はあらず然り各自互に感心すべき程の者にはあらず。然れども級の一致を要し、圓滿を計る爲めには各自其主張の幾分を謹まざるべからず即ち謙遜せざるべからず。

是を以て敵國の軍艦に對しても平素は相互祝砲を放ちつゝあるにあらずや、如何ある書簡と雖、其筆頭には必ず「御全家様愈々御清榮奉賀候」とあるにはあらずや。然るに今日の學生は是を以て無意の虛文とし虚禮と云ひ其謙遜の徳たるを知らず、却て路上相行きちがふと云へ雖少しも禮せず見て以て過ぐるあり大なる誤りと云ふべし。

斯の如く謙遜は人類に於ける絶對的必要の道德あれば其の實行の苦樂難易にかゝはらず、吾人はこの謙遜の徳を守り行はざるべからず、況んや謙遜たる事に依つて何等の損する事のなきのみならず、信實ある友輩を得、深厚ある尊敬を受け、品位をます事等得て數ふべからざる幸福利益を得るに於てをや。

開拓と北海道

第四學年 伊藤 顯山

亞細亞の一隅大平洋に面する大日本帝國は二十七八年の戰勝後は一大隆運に遭ふて、學藝技術の進歩より教育の普及海運事業勃興し、實業の發達陸海軍の大擴張に依て、各國の猜疑を招くに至りぬ。然りと雖現今社會の情況は漸く奢侈遊惰に流れ安逸嬉遊して、又危きを想はず人心軟化し已に國家の實力内に盡き外形は何程形式的の美觀を呈すと雖、瓶裡の花の久しからずして自から枯れんとし危機一髪に近づきつゝあるを想へば、誰か嘆せんとして嘆せざるを得んや。

然らば即ち吾人は何を以てか危機を未然に防禦すべきや他なし、富國の増殖を計り以て實力を養ふにあり。蓋し富國策たるや一にして足らず農業の進歩可なり工業の擴張可なり商業の發達可なり。然れども我國商業家にして如何に東西に奔走して多額の貨財を積むと雖畢竟彼我の交換流用に外ならず。蓋し彼等は却て國富を減少せしむるのみ國家の穀潰あり是れ何ぞ真正なる實業家と稱するを得んや、故に實業の發達を圖らむと欲せば、我國古來進歩せる農業に於て先づ之れを改良進歩せしめ以て、商工業の材料を產出するを可なりとす、然りと雖内地は山腹豁間に至る迄開拓し盡して殆んど剩す處なきを以て、如何に農事の改良を行ふとも其收穫少々あるべし今農業を以て、立國の大本とし外國と競争せむとせば目下我國の急務天賦の富庫ある北海道開拓策にあり、夫れ北海道の形勢たるや、津輕海峽を隔てて本州の北に横はれる大島面積大にして九州に倍し、地勢は中央に山嶽簇立し其支脈四方に走りて連亘し、全道の背柱をなすと雖も富原曠野、石狩、十勝、天塩等の平原は廣袤數十里に亘るもの、是れぞ文明的大農具を使用するの適地ならずや、加之地味豐饒穀菜盛に生長し山嶽には巨木良材森として繁茂し廣漠たる草野は好牧場ならずや、而して諸大河の魚介を生ずる事夥しく運漕灌漑の便あり、唯地勢の北に偏するを以て氣候寒冷なりと雖決して生存に困難を感じるの程度にあらず、嗚呼我北門の寶庫數百萬町の山野は、實に吾人が激奮競争して移住開拓すべき好望地なりとす、

若し夫れ茫漠たる原野習々たる、春風麥浪を摩する期或は穰々たる秋の實黃田に熟する處趣味長き北地農夫の生活を想像せば諸君よ！亦將之れを美望せざるか、

諸君若し之れを企望して開拓に力を盡さば、天然は無限の富源を與へ我國の富強期して待つべきなり。

獨立自助の精神

第三年級 三 上 哲 岩

自ら助くる者は天是れを助くとは、古今に亘り東西に通じて變ぜざるの大則あり、素より人間の事業は手を袖にして得らるべき物にあらず、皆困難に遭ふて屈せず、拮据勉勵勇往猛進したる結果あり、而して獨立の精神なければ人必ず墮落す、是れ人間の閱歷に徴して明かある處、國に獨立の精神なければ國必ず滅亡す、是れ世界の歴史に照して証する處實に獨立の精神は、一人に取りては豪傑と凡人との分るゝ所、一國に取りては強盛國と貧弱國との分るゝ所と云ふべし、嗚呼、獨立の精神ある哉、人の志を徹するは境遇によるにあらず、門閥に關するにあらず、只一の大決心によるのみ、自助獨行せよ、既に自助獨行の精神あらば、求めずして人我を助け、願はずして天我に幸を下さん、精神一度到らば何事かあらざらん、苟も己れの志を堅くし心を専らにして、勇往猛進せば、天下の事成し能はざるの事あらんや、故に「ナポレオン」曰はく、「不能ノ二字ハ愚者ノ字引ニノミ是レヲ見ル」と、されば貧困や困難や蹉跌や、如何に進路を遮るゝも、自助獨立の精神あらば、以て業をなすに難からず。

漫りに人に依るゝかれ、天を頼むを止めよ、是れ獨立の精神を銷磨する所以かればかり、富貴の家に生れずして、貧賤の家に生るゝを、人生の一大快事とすは、他なし、家貧賤あれば依頼すべき門地遺財なければあり、余輩は富豪の青年子弟が、徒らに父兄の資産に依頼し、滔々として放恣淫逸に耽るを見て貧賤の人の、寧ろ幸福あるを知れり、假令放蕩淫逸に陥らざるも、富豪の青年の薄志弱行にして、其の意氣の消沈せる、憫むべきに堪へざるものあり、聞く米國の學生は頗る獨立の精神に富み、彼れ等は勉學の資を給するに、足る者と雖も、徒に、父兄に依頼するを屑とせず、學資の幾分を補ふに、或は新聞を配達し、我は食堂の給仕

をかし、或は屋室邸園の洒掃を怠らす、其の行爲豈欽むべきにあらずや。翻て、我學生は如何、獨立の精神のあき事驚くに堪へたり、我國學生は、彼國の彼等が、あま所を恥辱とあすのみか、偶々實行する者あれば、いたく是れを卑む、而して其の半面には、早くより高利貸に關係を付け、或は狡猾ある手段を以て教師を欺き、或は父兄を欺きて金錢を消費し、或は善良ある田舎出の少年を魔所に誘ひ、以て勇氣ありとあし大膽ありとあし、多少の地位ある者に接しては、恰も鼠の猫に會合せし如き体を表し、在學中より早くも自己の先輩に阿附追従し、卒業後の勤口を求むるあり。

怪むあかれ、偉大ある人物我國に出でざる事を、疑ふあかれ。那人の業凡べて小規模ある事を、獨立の精神日々に衰へて、他に依頼するの念、益盛んあるの那人は、意志薄弱意氣銷沈是れを以て、能く白哲人種を背後に墮若たらしむるを得るか、是に於てか、邦國の前途頗る憂ふ可くんばあらず、余輩が、自助獨立の精神の必要あるを叫ぶ、豈徒爾からんや。

吾が生涯

第三年級 上山 佐一郎

人生五十愧無功と、又年々歳々花相似年人不同とは誰か咏せし詩ある哉、噫歳月匆匆として流水の如く、桃花水暖かあるの時は、いつしか落葉片々たる秋景とあり、金風一度吹いて孤雁悲想の曲を傳ふ、一往一來之を送て又彼を迎ふ、余が始めて輝々たる旭日を東天に望みしは今を距る幾年の昔ぞや、紅顔三五の時はいつしか去つて今や青年時代とありぬ。

此の限りある身を以て濫奥極まりあき學術を修めんとて、噫蟬螂の龍車に向ふに等しき而已、豈奮然勵精せずして可からん乎。

其れ坤輿の機軸は年一年に轉廻して余の彥陽に學びしより二たび乃ち春秋を向はしめ加ふるに、尙一歳の年月をも重ねしむ、然るに今や茫として、一の誇るべきあし、未來亦杳として一の依るべきあし。

あゝ身故山を去りて幾十里今は數里の近きにあり、碌々として爲す所を知らず、何れの時が能く素志を貫徹し錦を着て故郷に歸るを得ん乎。

此の思ひ彼れを思へば、涙潸然として、兩眼に溢るゝを知らず、然りと雖も前途尙渺あきにあらす、宜しく將來を誠め過去を鑑み心力を盡し吃々として倦まずんば如何ある偉業を成すやも知るべからざるあり

然るに今にして勉めざらんか、白髮蓬々として、途遠きを覺ゆるの時に當りて、嚙臍の悔、重ね々至らむ余も亦一個の男子、安ぞ此の微々たる花鳥の友たらん哉、其れ宜しく古今成敗を觀る、怒濤を蹴破し、劍山を踏み、百折不撓の精神を奮起し、以て功を竹帛に垂れんと欲す、古語に曰はすや、磐根錯節に遇はすんば以て利刀を分たすと、又曰ふ尺歩を積んで千里に至らんと、噫其れ天下の青年よ！余と心を同うするものあらば決して既往の失敗を憂ふるあかれ、唯將來の計を憂へよ。(了)

農業論

第二年級 高橋 源治郎

夫れ國家を維持するもの或は農あるか、或は工あるか、或は交易商賈を以てすべきか、曰く、此三者共に以て國を維持するに足る、然りと雖も國に各々特殊の本能ありて農に佳ある國あり、工に適するの國あり、或は交易商賈すべきの國ありて、敢て一括すべからざるあり、是れに依りて、獨逸は農を以て國を建て、佛蘭

西は工を以て、英吉利は交易を以て、各々其國の基を立つと云へり、我が大日本帝國は、何を以て國を建てんとしつゝありや。

熟々其地勢風土を案するに、地味の膏飮ある、氣候の温味ある、凡て植物の生育に適合す、之れ我が國開闢以來農業を以て建國の基礎とあしたりし謂れにして、上は畏くも、歴代の聖主能く農業を獎勵し給ひ、下萬民は、よく之れに従事したるを以て嘉穀よく豊熟し、眞に豊葦原瑞穂國の名にそむかざりしあり、見よ、彼の百姓と云へるは、古代人民皆農桑を以て、生活し、忠勤したりしものにあらすや、されば、勅語にも、「農は國家の大本あり」と宣給ひたるは、實に人生一日も缺くべからざる衣食住悉く農より出づるが故あり。

然るに、王政維新の新天地開かるゝや、泰西の事物、さながら破竹の勢を以て侵入し來りたる結果、工業にあれ、商業にあれ、駭々迅速の勢を以て發達し、軌近に至りては、殆んど一驚せざるを得ざるの形勢を示すに至れり。

斯く我が國の商工業に、迅速なる發達を來しゝは、偏に古來の積弊を一掃し、専ら歐米の學術技藝を折衷し、以て之れが改良進歩を計りたるに因れり、然るに、こゝに我が國家の大本たる農業界が依然舊態にして、他の商工業に遠く歩を譲りしは、抑も如何ぞや。

惟ふに、現今の農民にして、只に保守的舊弊を尊重せんか、其極途に國家の基たる本能を失ふに至るべし、されば、將來廣く學術を應用し、歐米各國の長所を取り以て我が短を補ひ、之れが改良發達を計らざるべからず。

知らずや、我が農業界は、自ら豊葦原瑞穂國と稱し、遠く三千年の古より始まりたる先輩あるに、僅かに二三年前より始まりたる、而かも後輩たる彼の米國の農業界に劣るとは、豈遺憾からずや。

將來農界に立たんとする人士青年よ、敢て自ら居することなく開進拓殖に勉めて止まずば、農の徳を揮揚すべき一道の光明を認むるの期は、蓋し遠きにあらざるべし。

願ふに、農は人民職業中最も健全に、最も尊重に、而して最も有益あるものにして富國強兵を以て任せんとする國は、蓋し其財原を農に取らざるべからざるあり。

加ふるに、學者と勞働者は、人體の兩足、車の兩輪の如く決して相離るべからざるものあるに、下層の世人舊夢未だ醒めず、農に従事して舊弊を保守せるものは、學者を罵り、有益なる講話會を只之れ空理虛論用ゐるに足らずとし、而して學者亦農民を無智無能語るに足らずとあせるの觀あり、又一方に農業者は、自ら農業を以て無味の職業あり、否、寧ろ賤業ありと思惟せり、之れに因りて之れを見れば、農は國家必須の要素たるを解せざるが如し、一掬の涙あきを得ず。

要するに今にして此の舊夢覺破せずんば、國家の將來大に患ふべきものあらん、學者は無智の人を訓育し無學者は大に學者に質し、學理と實際とを折衷應用し、黽勉以て之れに従事せば、彼の商工業の進歩と肩を並べんこと敢て難きにあらざるべきを信す。(完)

友と交はる道

二年級乙組 池田元治郎

友に交はる道とは何ぞ、各自の利益を増進するが爲に相誓ひ相約し其間の堅固ある事金石の如きを云ふ也、古來賢哲大に交誼のことを唱道し、各人又其大切あることを認識すれども其實行せらるゝを見ること甚だ稀也、あに概嘆の至りあらすや、人は皆其友人に此の徳あれかしかの義あれかしと能く希望を屬すれどもさて省

みて自ら之を修養する事は甚だ少あし、愛と敬とは友道に於て最も必要の元素也若し其一を欠くときは交誼は必ず完全からざるべし、愛せざれば交り親しきこと能はず敬せざれば親しみ久しきに至ること能はず。

友道は毫も媚嫉の分子を容るゝことを許さず人若し其友人が自己より幸福あるを見て眞に之を喜ぶこと少しにても嫉むの念を萌すときは此の人全く交誼の徳の如何あるものかを知らざる者あり、と云ふべし、友に喜ぶべき事あらば共に之を喜ぶこそ眞正の交誼なれ、凡そ性質好尚の異同は交誼に甚だしき關係あるものにあらず實際性質相異なるものにして斷金の交を結びしもの決して少あしとせず且つ己れ或る性質及び技能を有せざれども我半身とも云ふべき友人に此性質此技能あらば恰も己れ之を有するが如き補益あるべければかり、

友道に於て最も困難なるは友人をして其過失誤謬を覺らしむるに在り古人も「忠告して之を善道すと説けども友人をして我が忠告するは眞に友人の利益を思ふに出づることを了知せしめんことは緊要にして且困難也、是故に忠告は正當のものあるべく、而して其度数は頻々あるべからず告忠度に過ぐる時は之を受けたる者或は其過誤を憐れんとする心變し却て非を遂げんとするの念起ること有べく、又其忠告にして、正當からずば友人は身に覚えかき過を責められて不快の情を發し果ては我を敬愛するの念慮を減少するに至るべし注意せざる可からず。

少年の責任

第一年級甲組 山 田 武 治

凡そ國の強は富より生じ、富は輸出の多きによりて成るものあり、決して他の大小に關係するものに非ず、

輸出超過すれば、國家は愈々富に、且つ強と成ること、疑を入れざる處あり、之れに反して、輸入超過すれば、貨幣流出して、國家は貧困となり、遂に弱國とあらざるを得ず、而して、富は益々富強、貧は愈々貧困に落入りて、優勝劣敗の有様を呈し、弱肉は常に、強の食とあるを免れず。

我が帝國は、上に万世一系の皇統連綿として、未だ曾て外國の侮辱を受けたる事なく、明治二十七八年清國と兵を構ふるや、百戰百勝の爲め、二億萬兩の莫大の金及び臺灣とを得、又同三十五年に、英國と同盟の約を結びたるは、喜ぶべきことあれども、之れを裏面より窺へば、償金は何所とも無く散逸し、剩る毎年貿易に於て、輸入は常に超過して、許多の貨幣を流出す、こは我が國をして遂に貧困とあらしむべし、されば、如何にして貨幣の流出を止むべきぞ、他なし、万民一致協力して以て、本邦の地勢、及び位置の善良あると天與の國產とを利用するにあり、四面環海にして良港多く、氣候中を得て、新舊兩大陸の中間市場たり、此の利を以て商業國たらしめ、天產を利用して、輸出を盛にし、或は航海業に就きて膽勇を増し、進取の力を養ひ、或は海外に留學して智識を發達せしめ、或は亞弗利加探検を爲して、土地の形勢人情を察し、着々本邦の進歩を計らば、國家自ら富強とあるを得べし、かくせば、世界に超然として、卓出するを得べき國が、歐米諸國に後れたるは、本邦舊來の富豪者たる、農工商家は、大概祖先の遺財を以て、今日の富みを成せる者あれば、何づれも進取の氣に乏しく、其心怯懦にして、狂爛怒濤を冒し、赤道氷海を涉るべき勇氣なく、勞苦を厭ひ、安佚を好み、退守に安んじて、之れを以て足れりとし、交易を怠り、良港を利用せざりしに由る、然れば、少年諸君、報國心を振り起し、一日も猶豫する事なく、學を修め、智を磨き、農工商、或は航海業、漁業、又は海外留學、或は探検、其他種々の業に、黽勉從事し、益々盛に交通し、輸出を超過せしめ我が大日本帝國をして、天下無雙の富國、且つ強國たらしむるは、豈少年の一大責任にあらずや。



Character is power

特別會員 佐 藤 春 吉

陰鬱ある牢屋に繋がれたる Marius を刺さんとしたる刺客は “Darest thou kill Caius Marius?” と大喝せられ
て戦慄しと首を棄てて一目散に脱走したといふ事がある
ある時 Napoleon (1769-1821) が單身長き山狭路を通過すといふ報知を得て中途ある樹陰に身を匿して彼を
襲撃せんと企てた一青年があつた、此絶世の勇士はそれとも知らず國家の經綸に思ひをこらして此静閑ある
幽谷を一步一歩たどつたのである、折しも足元より飛出した一羽の小鳥は端かくも此小膽ある刺客を驚かし
たのみならず伏兵の所在を皇帝にさとしめた。

彼は一言をも發せず兩眼を以て此青年を烈しくねらみつけて微笑を漏らした其閃々たる眼光其稜々たる頬邊
其中にはたしかに一種云ふ可からざる魔力を藏して居たのである、一撃の下に彼を刺さんと持ちたると首は
腦殺されたる青年の手より落され大小百余の戦場にて練磨されたる老勇士は國家の經綸に再び思を馳せつと
首をたれてこの山路を靜かに横斷したのである。

此事たる彼に取つては微々たる一小出来事に過ぎぬので一時世界の耳目を聳動したる Napoleon が生涯の歴

史中には記録する價值を有せぬ事であるが如何に高尚ある品格がと首よりも銳利あるかを説明するに余りあ
りである、眞に Character is power である。

Bulwer が云ふた

“Let a king and a beggar converse freely together, and it is the beggar's fault, if he does not say something
which makes the king lift his hat to him.”

一國の帝王が尊敬の意を表することを喜ぶものは誰であろうか、學識ある人にか將智力あるものにか、彼は
恐らく此等のものには喜んで帽を脱せぬであらう。

尤も赤貧にしてしかも卑賤あるものでも帝王と同じ程度に時としては其以上の程度に持ち得べきものは何で
あらうか そは Manliness といふものである。

如何に深遠な Knowledge や Learning を有する人も Noble Character を抱く志士の眼前には一股の光明を
失ふものであつて恰かも太陽の太陽に於けるか如しである。

“Not money, not notoriety, not fame even, but power is what you want. Manhood is greater than wealth,
greater than fame. If there is any one power in the world that will make itself felt, it is character.”

革命戦場の際 Richard Jackson は英軍に投じて戦はんとの意志を起したとめに捕はれて一時田舎の粗造ある
牢獄に幽閉された、若し彼が逃亡せんとすの意志が起つたならば彼は慥かに其目的を達したのである。

然し氏は國法の嚴守せざる可からざるを知つた而して彼の良心は此目的を達せよと彼に命じあかつた、彼は
獄守に請ふて毎日月中は出獄を許され暮に至れば正確に歸獄するのである、此の如くして八ヶ月の間彼は正
直に此獄中に起居したが遂に宣告を受けるために Springfield の法庭に移さるゝ筈であつた、彼は獄守に告

げて云ふには余を Springfield まで引率するは余計ある勞力と費用である然かす余は單獨に赴かんと獄吏も彼が性格を知り居れば立所に其請を許した、彼は即夜旅装を整へ出發した、道に Massachusetts 州會の議員 Mr. Edwards に遇ふた、彼の問ひに對して罪人は己が境遇を詳かに語つて互に別れた。

後に至つて彼の罪蹟は明白となり愈々死刑の宣告とあつた州會は彼を救ふべき余地の有無を議したが各員何れも死刑を以て正當の罪名と思ふた、Mr. Edwards は路上に彼に會合した事より彼の性格を熱心に説明したために州會の輿論は一變し彼は遂に無罪とあつた事實がある。"Character is protection."

一千七百九十八年米佛間の外交が危機一髪に迫つた際に大統領 Adams 氏は一市民として Vernon 山麓に一竿の風月を樂んでゐた身である George Washington に此の如き密書を送つた。

"We must have your name, if you will permit us to use it; there will be more efficacy in it than in many an army."

あんと "Character is power" ではあいか

Wellington は常に斯う云ふてゐた佛の軍隊中に Napoleon 一人のあるのは四方の援軍が加はつた程の戦闘を増すと Richter は彼の大膽にして豪氣ある, Luther を評して "His words were half battles" と云ふた. Napoleon と云ひ Luther と云ひ彼等の有する Noble character は如何に迷出して世界史の局面を開展したかを見よ. Dr. Johnson は有名なる辭典學者で又道德家であるが Burke を評してかう云ふた。

"you could not stand wits Burke under an archway while a shower of rain was passing, without discovering that he was an extraordinary man."

現印度帝國の創設に至大の勳功を荷ふたる Warren Hastings が Burke の已れを彈劾した事につきて斯う自

評した。

"I think myself the basest of men while Burke, is hurling at me his terrible denunciations when on trial for my alleged misrule in India."

Character は眞に恐るべきものではあいか。

Franklin (1706—1790) は米國獨立の際非常に盡力したる偉大であつて又品性の修養には苦心した學者である、氏は恐るべき自己の Character を自評して云ふた。

"Hence it was that I had so much weight with fellow citizens. I was but a bad speaker, never eloquent, subject to much hesitation in my choice of words, hardly correct in language, and yet I generally carried my point.

John Brown が嘗て云ふたことがある。

"One good strong, sound man is worth one hundred, nay, one thousand men without character, in building up a state."

眞に千古の金言である。

合衆國第三期の大統領 Jefferson (1743—1826) がある時 Washington にかゝ書して送つた。

"The confidence of the whole nation centres in you."

僅々九字の文千百の形容詞を連ねたるものよりも重みがあるのである、氏が品格の高尚にして雄大なる程度が察せらるゝのである。

當今の我帝國内に於て政治界軍人界實業界教育界を通じて果して Washington 程の Manliness を抱く志士が求め得らるゝであらうか。

Lincoln, Grant, Garfield, Gladston, Bismark. 其名を聞きても吾人は戰慄するやうお感を起すのである。高尚なる品格が人を腦殺せしむるのは恰かも電氣力の如しである。

A few great men have ever been the salt which has preserved the nations from premature decay, 人生慾望の極点は勢力である然し國民を左右し世界を風靡さすに充分なる勢力は Noble character を通じて得たる勢力からざる可からずである。

一千八百一年 Canning は書いた。

“My road must be through character to power; I will try no other course; and I am sanguine enough to believe that this course, though not perhaps the quickest, is the surest.”

一國の歴史と一家の傳記とを緋け高尚にして純白ある品格の人が如何に驚くべき雄大無邊の事業を完成したかを曉るであらう William Penn, Roger William, Xavier Livingstone, christ 其他宗教學術のために危険を冒したる偉人傑士の生涯を尋ねよ、九死一生の間際に於て彼等の訓練されたる品性は彼等をして巧みに野蠻人の毒刃を免がれしめたかを知るであらう、眞に “Character is protection” である。

那破翁敗北の時 Moscow 府を出奔したる一群の兵士があつたが其隊長は Hesse-Darmstadt の王子 Emilie である。其夜は殊に身をきる如き北風の吹き荒ぶ夜で雪さへ非常に降出でた、寒さは堪え難き程で疲勞は出るし空腹は無論のことであるので Cossacks の追撃は急激であるけれども止むを得ず一群は道傍の家畜小屋に其夜を明さんと企てた。

翌朝未明に王子は眼より醒めて見れば北歐の曠野に旅寐の床にも係はらず非常に溫氣を感するのである、耳を倚てよくよく四邊を聞くに屋外は前屋に異ならずウラル風が烈しく吹き荒さんである、あたりに人のけはひとではおし、怪みながら身邊に注意すれば兵士等の外套は皆王子の周圍に脱ぎ棄てられ自身は銃を枕に其附近に凍死してゐるのである。

王子の身が高貴であるが故に兵士等はこの Willing sacrifice をかしたのではない畢竟彼の品格が其従者をして此善行をよぎあぐせしめたのである。

“Character is protection.”

Paris 城包圍攻撃の時の勢頗る猛烈で遂には城中糧盡きて如何ともすること能はざる状態に陥つた事があつた。然し城中の兵誰一人として圍を破つて此窮狀を國民に報知せる勇氣を有するものが出でぬのである、ある夕暮の事砲煙天に漲らんとする百万の敵軍を事どもせず小舟に棹さし優然として Seine 河を下つたものがある、これぞ城中にありし Govenieve といふ女傑であつて敵營を破つて將に餓死せんとしてゐたる城中の有様を國民に訴へたのであつた、爲めに糧食の供給もでき城兵再び勢を恢復し Franks も止むあぐ武器をよさめて一時國外に引退した事があつた、今に至るまで此烈女は Paris の Patron Saint として市民の爲めに尊敬されてゐるのである。

Paris は殊に Noble character に富める女傑を出す所で “Maid of Orleans” の功績は佛國史を讀みたるものゝ記憶に存する事である。

Emerson が云ふた。

“I have read that they who listened to Lord Chatham felt that there was something finer in the man anything which he said.”

Carlyle が “French Revolution” に Mirabeau の事業を記したが世界の耳目は彼の高尚にして純白なる品格を

表はすには其記事が尙不充分であると云ふた絶世の文豪も偉人の品性の如何に偉あるかを書く能はざりしと見ゆ。

“The authority of the name of Schiller is too great for his books.”

How few young boys realize that their success in life depends more upon what they are than upon what they know. It was character, not ability, that elected Washington and Lincoln to the presidency.

女皇 Victoria 少時母に昇んだ。

“Mamma, I can not see who is to come after Uncle William unless it is myself.”

其後彼女が皇嗣であることを知つた時に再び彼女は云ふた “I will be good.” と彼の純白にして高尚ある品性が数字の間に溢れてゐるのである、其後五十年が経過して女皇子は Canterbury 大僧正の目前に招かれ榮譽ある “Queen” の尊稱を授けられた其際女皇子は衣服を着代へる猶豫もかく髪も櫛らず其まゝ急ぎ出院したとの事である、間もかく王は崩御され國政をこるこ多忙あるため女皇は白粉を用ゐる余暇もかく明晰ある眼識圓滿ある品格を以て太陽の役することおきといふ大帝國を統御されたのである。

ある時 Petrarch が證人としての宣誓をかすために法庭へ出頭せよと命ぜられた、判官は彼の品格を洞見し彼は口頭のみにて充分あり宣誓の必要を認めずと云はれたとの由 “Character is power!”

Lord Chatham をよく知つてゐる一士官が彼を評して云ふた。

“No man ever entered Mr. Pitt's closet who did not feel himself a braver man when he came out.”

僅々十余言よく偉人の品性を發揚したものである。

Florence Nightingale がある時 Cremona の野戰病院を巡廻した時に苦痛に呻吟したる無數の負傷者さへも一言を發せず院内何んとかく神聖にかつたといふ話がある、全く女傑の品性に感動したる結果に外からぬのである。

Emerson が云ふた。

“A man, Caesar, is born, and for ages after, we have a Roman Empire. Napoleon changes the front of the world, Bacon turns in a new direction the thought of the human race. Newton interprets the thoughts of God. Franklin unlocks the temple of Nature.”

歴史を讀め古今の偉人が雄大ある品格を以て如何に廣大無邊の大事業を成したるかを知るであらう。

Red Sea に於ける Moses Thermopylae に於ける Leonidas, Zurich 湖畔に於ける Winkelried, Lori 及 Atroha に於ける Napoleon, Nile 河畔に於ける Nelson, Quebec に於ける Wolfe, Ticonderoga に於ける Allen Yorktown に於ける Washington, Erie 湖上に於ける Perry, New Orleans に於ける Jackson, Mississippi に於ける Farragut, Waterloo に於ける Wellington 近くは我維新の際に於て甲東松菊の如く老西郷の如く偉人の品性はよく發揚して歴史の局面を轉換したるにあらずや。

Louis XIV が嘗て Colbert に問ふた France の如き人口多き大國を統御しながら Holland の如き小國を征服し能はざりし事を我ながら怪むと、宰相笑つて答へた。

“Because the greatness of a country does not depend upon the extent of its territory, but on the character of its people.”

英勇豪傑の品性は國民の花である Chateaubriand が云ふた彼は只一回 Washington に接した然し此一回の瞥見が彼の品性を陶冶するに充分ある材料を供給したと英國のある柔皮製造人が製皮の良質あるを以て知られ

てゐた彼が云ふには若し余にして Carlyle を讀まざりしからは余は今の如き良好の皮革を製し能はざりしあらんと。

Franklin は有名なる電氣學者にして高尚ある品性の志士である、彼は London の一工場に出入したゝめに其工場の品性が全然變化を來たしたといふ。

Ariosto と Titian とは互に其高邁なる氣風に感染して一層其品性を高尚からしめたといふ。

一校の首長の品性が純白にして高尚あらば其訓育を受ける學生も自然に其氣風に感化さるゝのも自然の道理である福澤翁によりて三田の學風は養成され新嶋某によりて同志社の氣風は涵養されたのである。

Tell me whom you admire, and I will tell you what you are.

美術に關する書冊及其作品が如何に其作者の優美ある思想雄大ある品性を發表して遺憾あきかを見よ。

Michel Angelo 彼は現世紀の人物か否彼の肉体は已に數百年の昔羅馬城外一片の白煙と化したのである。然れども彼が高尚ある品性は化して一基の彫刻とあり今に羅馬の花と歌はれつゝあるに非ずや。

Washington Grant Lincoln 彼等は已に死したるか、然り彼等は已に Potomac 河畔蕭々たる一塊の墓碑とありたるあり然れども彼が雄大ある品性は化して米國の獨立とあり如何に世界の人心を支配する事の偉大ある事よ。

試みに思へ Moses としての Egypt; Daniel としての Babylon; Demosthenis, Plato, Socrates としての Athens を、耶蘇前凡二百年 Hannibal としての Carthage は如何ある状態であつたであらうか Caesar, Cicero, Marcus, Aurelius

としての古代 Rome は如何ある國勢を呈したであらうか、Napoleon, Hugo, Pe're Hyacinthe としての Paris は如何に零落ある境遇を表はしたであらうか、英國に Shakespeare, Milton, Pitt, Burke, Gladstone があつたから如何に此國は平凡であらうか、Boston に Garrison や Phillip や Whittier や Emerson や Holmes が生れあつた

あら如何に其市は殺風景であつたであらうか、New York に Peter Cooper や Horace Greeley があつたからば如何其地の文學は無味であつたであらうか。

此等の國此等の州此等の市此等の地其中には幾百万の生靈が名もかく聲もせず生れて而して死したのである然し彼等は其國家土地に寸分の光明をだに與へずに明より闇に還つたのである、然し如上の志士が其方寸に貯藏せし Noble にして Grand ある品性は如何に其歴史を裝飾して國民の花と歌はれしか。

Peter the Hermit, Godfrey de Bouillon としての十字軍を起さしめよ其結果は如何であらうか、英國より Gladstone を引去れ誰か喜んで十九世紀の英國史をよむものぞ、獨乙より Bismark を葬れ誰か案を打つて今世の獨乙史を綴くものぞ。

古代伊太利奴隸の腦中には Cicero, Scipio, Gracchi の名は神の如く反射したのである。人心の腐沈したる伊太利時代には Dante の名は警語として市民の口頭に上つたのである。

Byron が歌ふた。

“The Italians talk Dante, write Dante, and think Dante at this moment to an excess, which would be ridiculous but that he deserves their admiration.”

日々草木の枝葉を喰ふて生活する昆虫は其枝葉と同一の色に自然と同化さるものである。吾人が日常心の食物として外界より吸入する材料は其耳目より入ると其鼻口より入るに論かく均しく吾人の品格を構成する原料とあるのである、同種は同種のもので産み、Acorn は Oak とある胚芽にして羽毛の類似ある鳥類は共に群集すとは余りに奇ある現象ではないのである、品性の高尚ある志士と接すれば其品格に感化せられて自然に自己の品性も高尚とあり品性の下賤ある廷夫と交はれば知らず知らず自己の品性の下賤とあるものである

如何に秘密に如何に奥深く藏すとも胸中の現象が其面貌又は其操行に表はれるものである。亂暴にして野劣ある人の一團が卑賤ある題目につきて難談しつゝある一室に高尚にして無垢ある Character の人が入来りたる場合を目撃したることはあきか、群衆の品性調子は立どころに改まり附近の空氣は此純白の分子を直ちに波及せしむるのである。

Character is a very different thing from reputation.

Reputation is what a man is thought of to be; character is what a man is.

偉人の偉が如何に偉であるかを知るに他人の説明又は紹介を要するものではない。人の學問又は品性が如何に深遠で如何に高尚であるかを知らしむるために其稱號又は職名を故らに名刺の頭上に冠する必要を吾人は認めぬのである。如何に其人の品性の高尚あると如何に其人の學識の幽遠あるかは障子を隔てゝ其話を聞きても推察せらるゝのである。如何ある書を汝は好んで讀むか余は汝の書によりて汝の品性を判せんか。東都三田の一隅に福澤某といふ偉人がゐた博士の名譽ある稱號を提げんと發議したる當局者があつたが翁は容易に承知せぬ。彼は其頭上に此尊號を冠するには諭吉の名が余りに偉大であると信じたのである。其實質が偉大にあらざるものこそ虚稱を冠して偉大の幾分を補綴せんと勉むるのである。

“We do not need an introduction to a great man to feel his greatness.”

If you meet a man of character on the street on a cold day, you seem to feel the mercury rise several degrees,” Luther が云ふた。

“The prosperity of a country depends not on the abundance of its revenues, nor on the strength its fortifications, nor on the beauty of its buildings, but it consists in the number of its cultivated citizens, in its men of education, enlightenment, and character; here are to be found its true interest, its chief strength, its real power.”

借問す我輩三百有余の青年諸子よ、諸子是如何に Noble に如何に Grand に如何に Sublime に如何に Pure ある品格を有するか且將來之を構成せんと心がけつゝあるか。

Know thyself! とは古代希臘の金言である。

若し此篇にして諸子が品性修養の道に幾分の光明を興ふるを得ば記者の勞の徒爾にあらざりしを陰かに喜ぶのである。

雄々しき少年

第二年級 西澤 鐵治 郎

其 一

英國に雄々しき少年ありき。名をロバートと呼ばれ、其心の輕快ある羽毛の如し。性快活にして大膽、且つ家庭の教育宜しきを得て貪慾からず、ブローニーと稱する馬に乗るは、彼れに與へらるゝ唯一の大快樂ありしを以て、そを我物にせんことを秘かに願ひて屢々、不良の舉に誘導せられんとせしが、彼れの良心は、之れと戦ひて斷然其議を排し、彼れが持つものに對して感謝したり。

彼れは彼れの伯父の宅に於て一日を暮さんと、例のブローニーに打ち乗りて、ある日曜日の朝我家を出發せり。然るに圖らざりき、雪は地上に積りて、一面に銀世界あり。されど、彼れはあどてかばかりのものにためらふべきか、殊に其處には徒歩競走のある筈にて、銀のはめたる喇叭は、これが賞品ありしかり。

されば競争の準備として、數週間其技を練習せし彼れは、今日行かすば永き苦心は泡沫に歸すべきのみ。競走開始は十一時とす、さればロバートは、急げよや急げと頻りにブローニーを勵し、が、悲しい哉、其希望を満足せしむる程に疾驅するは、ブローニーに對して容易のことにはあらざりき。そは雪の深くして、彼れの密生したる脚毛の上迄も屢々沈みしことのあればあり。

中途に彼れはジョーンと名づけられたる哀むべき老夫婦の、細き煙を立つる淋しき小屋を通過せり。ロバートは老人の小園に草探ると其妻の衣を干し、或ひは他の仕事を營み居るを屢々見たれども、未だ曾て談話を試みしことはなかりき。丁度彼れが通り過ぎし折しも、彼れを呼ぶ女の聲の響は、四邊の寂寞を破りて異様に彼れが耳にひびきぬ。何事やらんと鞍に於て顧れば帽子も肩掛も着ずに、ジョーン婦人の走り來るを見たり。

「おつ若き主人よ」と失望の体にて彼女は叫びしが、又語を次ぎて云ひけるよう、「願はくば、妾が爲めに醫者を迎へにチエスターに行き給へ、妾が可憐の老人は、突然病の冒すところとありしが、行くべきものとは近くに一人もなし」と。

「チエスター迄はやつ其れは此處を距ること殆ど五里あり」。

「貴馬はあなを運ぶを得、加之妾は夫を見棄つべきに非ず、おつ若旦那彼れは非常に——大病あるぞ」。

其二

ロバートは他の日に此病氣が起るようにと願ひて禁じ能はざりき。

チエスターは彼れが伯父の家とは異りたる方向にあり、何れのものも彼れを待ち設けて居るからん。老ひたるジョーン君は、彼れの親戚にもあらず。何故に彼れをして醫者を迎へしむべきかと、斯かる空想に耽りし彼れは、如何に耐え難く其處にゐみしか。然れども之れまた一瞬時間に過ぎず、遂に決心の色を面に表はして曰く、

「貴婦は夫の側に歸られよ、我れは醫者の住居を知れるにより、必ず貴家の困難をつぶさに知らすべければ、心を休めて看病せらるべし」と、直ちに驢を返して反對の方向に道を急ぎぬ。

小馬と彼れの乗手は、今しも寒冷ある北風に面を向けて進み居りしが、其劇しき吹方はロバートを突き刺すばかり、加ふるに陰鬱ある雪天よりは、或る大なる白片が其雪風によりて空氣を暗くせし迄も、時々刻々其烈しさを増して降り來りぬ。されば憐哀あるロバートは、決して醫者の宅に到着せざるからんまで見えき、彼れは今失ひつゝある總ての愉快、即ち嘲詠を得ることに就きて沈思しかから醫院の見ゆるほとりに來にけり。彼れは、ブローニーが其の毛皮より湯氣を上げて喘息せる間に、凍えたる指にて傳鈴を引きし。

程かく戸を開きて立ち出でし小使に向つて小供は叫びぬ。「老ひたる憐むべきジョーン君は大病あれば、彼れの出來得る限り迅速に行きて、彼れを診察せらるゝように、乞ふ告げよ」と、

「醫師は今外出せんとするところにて、彼れが爲めに馬車は來れり。御望み通りに貴旨を傳へん」との答にロバートは心の中に思ひけるよう、「おつ我が遅からざりし嬉しさは、實に譬へんようなし、若し數分遅かりせば、醫者は終日留守あるべし。競走は最早終りてからん、然れども彼等哀れある老人達に盡せし親切を思へば、何の悔ゆる所やあらん。思ひ出せば我父の教訓に『正しきことをあせ、而して其れに就きて何事も語る勿れ』とあり。されば我れのかく遅くありしは、必ず人に語るまじ」かご考へつゝ殆んど一時伯父が家に着き、此家の小使にブローニーを托して喜びあがら、愛らしき兒供聲の響を送る暖室へとかけ込みたり。

其三

「おやロバートは終に此處に來りしよ」と、林檎の如き紅の頬を持つロバートが、不意に姿をあらはし、時、

小供等は叫びぬ。

「やー何が君を遅くせしか」「君は時刻に後るゝこと正に二時あり。君は雪中に失はれしにあらざるかと我々は案じ居りし」「何者が君を引止めしか」と殊に親しき従兄弟のチャールズを始め、他の少年迄も四週より散々に問詰めければ、ロバートは殆んど困じ果て、「決して我れが引止められしを氣にかくるを、我れは遂に來りしにあらすや」と盛んに燃え立つ火の側にて、凍えた手を頻りにのみながら答ふるのみありき。

次で彼れは主要件たる競争は、誰れの勝つ所とありしかを伯父に問ひしが、雪嵐の爲めに之れを延期したり。但し太陽は輝きそめしにより、晝食後競争を開始すべしと云ふに始めて心を安んじ、秘かに思ひけるよう。「然らば兎に角我れは余り遅からざりき。當時は困難ありしかど、今にして思へば、雪嵐の降りしは却つて我爲めに好都合ありし」と。暫しありて晝食は知られられければ、競走者の面々其々に食堂に會せしが、一人として、長時間の乗馬と親切ある動作をせしとによりてよき食欲を得しロバートの如く、甚しくあぶり肉と團子とを喜びて喰はざりき。食後一時間計りにして競走は開始されたり。待ちに待ちたるロバートの喜びや如何ありけん、鹿の如く飛びつゝ善く走りしが、其甲斐ありて第一に決勝点に入りぬ。望みを全ふせし彼れは、銀のはめたる喇叭を其首に垂れて、勇しく歸途に就きしとき、積雪の如く純潔なる彼れが心と、喜色漫々たる其顔とを没しつゝありし夕日は如何に照しゝか。

翌日彼れはジョーン氏小屋を訪問せしとき、醫者の直ちに來りしこと、哀れある老人は殆んど恢復せしことを知り、且つ神の如く有難がる其妻の厚き感謝を受けて、大に満足せり。

ロバートは誰れにも此冒険に就きて毛頭語らざりしに、豈計らんや彼れの父が醫者より始終の物語を聞きしとは。彼れは夢にも之を知らざりしが、維れ改まる新年の日に、門前へ引かれ來りしブローニーを見しとき、

「ブローニーは本日より其許の所有とある、我親愛ある少年よ、此馬は我教訓を學びし息子にまで、父が贈る年玉あるぞ」てふ話を聞きて、彼れは且つ驚き、且つ喜びて手の舞ひ足の踏む所を知らざりき。

男らしき少年

(上)

第二級甲組 富 永 孟

ロバートは甚だ大胆に快活ある一少年にしてその敏捷あること猶空中に飛翔する鳥の如くありき、嘗て伯父の家に銀を嵌めたる喇叭を賞品とせる徒歩の競争ある由を聞き數週間以前より練習して競技の準備をせり時しも冬の事にて降雪は日を重ねしかば歩行を極めて困難に且つ十一時に開催せらるべき豫定ありしかば早々我が家を立ち出でんとてブローニーの手綱を解きつゝ出發の用意をせり、ブローニーは小馬の名にして慈愛深き彼の父は彼の爲めに一日を借り受けしものあり、彼はこの小馬に打跨り降る雪を事ともせず勇みに勇みて一刻も早く伯父の家にと急ぎけり、然るに雪は益々降り積り北風さへも加はりければ徒に心のみせき立てゝ思ふ儘には進み得ざりき、乗馬に日頃樂味を有する彼は度々惡しき心の浮み出で小馬を盗まんと考へし事ありき、されど彼は父より教訓せられし事とも思ひ出づると共に直ちに心を轉じ折々馬に乗ることを得るにつけて只管満足し居たりけり、ロバートはやがてジョンスと名づけられたる老夫婦の住める淋しき小屋の前を打すぎたり、此の所は日曜毎に彼の伯父の家に行きし際通りし事ありて主人ある老人のせまき畑の中に草を刈り取り或は老夫婦の衣服などを乾し居る等の事を屢々見しことありしが彼は一度も語りあひ合ひし事なかりき、恰も彼が此の所を通經し終りし頃不意に妻の聲とおぼしき響を聞きぬ、何事からんと後の方を

振向きしがかの老いたる妻は何事か危難の起りしが如く肩掛も帽子も着ずに此方に向ひ走り來れり、ロバートはたゞ莫然として止まり居たりしがやがて彼の妻はロバートに打ち向ひ「おー若き御方！老夫は不意に病に懸りたれど此の近傍には一人の頼るべきものもなし何卒御慈悲を以てチエスターの醫者迄行き給へ」といふ悄然として物語れり「チエスター迄」と思はずロバートは叫びたり、老夫人は尙も語をつぎ「されど君の小馬を走らさば一寸の間かり人手があれば我は病める夫を見捨つるに忍びず嗚呼慈悲深き御方よ！何卒我々老夫婦の困難を救ひ給へ」といふ失望の調子にて哀を乞へり。

(中)

チエスターは伯父の家より反對の方向にして此所より凡そ五哩許りも離れし所あり、もしチエスターに行かぬには今や始まらんとする樂しき競争を如何すべきおー友人は余を今かゝと待ちつゝあらん且つジョンス君と余とは親族にもあらず我に限つて醫を迎ひに行かざるを得ざるかと思へば彼は他日に病氣の起るを欲して禁する能はざりき、然れども彼は元來慈悲深き性ありしかば斷然心を決し老夫人に打向ひ「余は醫者の居所を知れり君は歸りて夫を看護せよ余は行きてこの事を彼に告げん」と言ふより早く小馬に鞭ちて反對の方向に走り去れり、小馬と乗り手は今北方より襲ひ來る寒風に面を向けて急駛しつゝありしが風は益々激しくその勢恰も槍の如く寒さは身体も凍りはてんかと思はれたり、雪は益々降り出で一刻は一刻よりも激しく恐ろしき吹雪は四邊をして暗闇たらしめ爲めにロバートも一時は目的地に達し難く見えたり、然れども彼が忍耐不屈の性よく之等の困難を排してつひに醫者の家に達する事を得さしめたり暫時の後彼は小馬を下り凍えし手もて鈴を押せり、間もなく小使は出で來れば彼は今迄の物語を申し併せて「ジョンス君は急病あれば主人の出來得る限り速かに來りて彼を診察せよ」とたのめり、時に遙かより一の馬車の來るを見しがこは

之れ主人の常に乗るべきものにして今や彼は外出せんとしたる間際ありけりあゝ若し彼をして數分間遅からしめんには或は主人は外出し終りしや計りがたかりしあり、やがて彼は今頃は競争も終りて、喇叭は誰かの手に落ちしからんよしを得ること能はざるも余は哀れある老夫婦を助けしかば決して羨むことなしと考へ再び小馬に打乗りもと來し道を踏み分け行きしが行く／＼諸々の事を思ひ浮び決してこの事を他の人々に話さざるべしと決心しつゝ殆んど二時間許り遅れて伯父の家に達せりかくて彼は小馬を小使に渡し樂しき話聲の響ける一室に向つて急ぎ入れり。

(下)

おーロバートは來れり！君は最後の一人ありし！君は何が爲めかく遅くありしや？或は雪の爲め道を踏み迷ひたりしにはあらずやあど彼が赤き林檎の如き頬にて入り來りしとき數多の童子の叫べり、然れども彼は決して實を吐かず競争は誰が勝ちしやと、盛んに燃えつゝありし火に寒き手足を暖めつゝ尋ねしが彼の従弟のチャールスは激しき雪荒しの爲め中止せしがやがて太陽は再び輝き初めしかば晝食後開催せんと答へたり。然らば余は決して遅くはあらざりき、かの激しかりし吹雪は一時大に困難と思ひしかど今は却て幸福とありしとは當時彼の心にてありしからん少時の晝食は始まり彼長き行路は食慾を進ましめ親切ある善行は彼の心を嬉ばしめしかばあらゆる馳走は彼の食慾をして満足せしめたり、それより一時間許り過ぎて競争は始まり彼はその勢恰も奔馬の如くによく走り第一着を以て決勝点に入れり名譽ある喇叭は夕暮彼の歸途頭より垂れ下りて如何に彼の心を嬉ばせしか、翌日はジョンスの家を訪問せり彼はジョンス夫人より醫者は直ちに馬車にて來り老夫の病氣も今や殆んど全快せりと云ふを聞きて大に喜べり殊に彼の心に満足せしは老夫人よりの感謝にてありしあり、然れども彼は我が家に歸りし後も少しも他言せざりき、とかくする中新年とあ